

浄瑠璃素人講釈 御所桜堀川夜討 三段目切 弁慶上使の段

杉山其日庵

〈出典：岩波文庫『浄瑠璃素人講釈（上）』岩波書店、平成16年10月〉

この外題は、文耕堂や三好松洛の作と聞く。また初演は、元文二〔一七三七〕年巳の正月（大正十五年を距る百九十年前）に竹本座にて若竹政太夫、即ち二代目義太夫、後の播磨少掾となった太夫が役場と思うが、五行本に竹本越太夫、鶴沢仲助とあるは、後年江戸で改作して講座に上せたとの事で、これらが風となって今日伝わっておるとのこと。しかし元来の作が悪いためか、文章をいじりいじってメチャメチャにしたのみならず、語り方も何が何やら判らなくしてしもうたものである。随って絃の方も、ヨタの競争会見たように、太夫と共にあてぶしばかりになっている。されば大掾生存中に曰く、「『堀川夜討』の四段目『藤弥太物語』は、団平師がスッカリ朱章を調らべて、キチンと致されまして、前の源太夫〔六代〕と寛三郎が勤めましたと聞きましたが、三段目だけは吾々生き残った者どもが、何とも申訳ない哀れな物にしてしまいました」と云うていた。

即ち小音であったと云う二代目義太夫、即ち若竹政太夫、いわゆる播磨少掾の語り場故、尤も真西風に位取を語るが第一で、足取、音遣いが大変にむつかしいのである。枕からシットリと大地にメリ込むように弾いたり語ったりして、「ムヅと座して一礼し」まで語ったら、満場の見物は、モウその舞台に酔うて何処も彼方も元暦頃の気風になるように、語りかつ弾かねばならぬ。「程もあらせず入来るは」の一句は、訳が分らぬでも元暦頃の鎌倉と云う事を思え、また大山の崩るるばかりの大難題を胸に持った弁慶が、鎌倉からわざわざ京に馳せ上って、今この所に入り来る時の心地で語れと、『浄瑠璃古咄集』に書いてある。総てトン、ツン、テン、と云う音に、限りなき重味ある妙趣を含んだ三段目の音遣いを研究修業せねば、齒の立たぬ品物である。

「イザお通り」は侍従太郎で語り、「御案内」とは花の井で語る。「跡に引添ふ武蔵坊、鎌倉殿の難題を、ツイこうこうと云へばへに、暫く心奥の間へ、打連れ伴ない入にけり」の文句が、この段の一番むつかしい所である。古今独歩の忠臣武蔵坊弁慶の息組を語るは、この所を外してはモウないのである。

予ても云う通り、義太夫節の半可通の人々が、ヤレ其処でソー語れば奥の筋を割ってしまうとか、ソー云えば人形の腹が割れるとか云うが、それはこの芸を知らぬ人の言である。元来この義太夫節と云うものは、能楽から出たもので、組織が一切能楽であって、チャンと主手脇が極まっている。それに主手連れ、脇連れが付いている。それから能楽は、絶対に表情を禁じてある。義太夫節は表情が主である。それが尤も極端である。それ故両者ともその極端がむつかしいのである。

表情を語れば割るのである。割るにはその人形の意思の変化と境遇の差別が、太夫の腹にチャンと理解せられた表情でなければ徹底せぬのである。それを実行するには、技量が入用であり、その技量は修練せねば出来ぬのである。その修業には斯芸の種が正式でなけ

ればならぬ。今の太夫どもは、絃いとの音おんの何物たるかをも知らず、また極きまり切った三段目、四段目の音遣いをも知らずして、暗雲やみくもに嘯鳴り散らして、人気かねと金だけを欲しがっているから、全く浪花節ななむねしと一所いっしょの、無茶苦茶芸てんぐとなり下ったのである。

そればかりでなく、今の素人の馬鹿てんぐ天狗どもが、一番この芸ぞくの賊である。三段目、四段目ばかりより外ほか知らずに、太夫りょうがを凌駕りょうがせんばかりの殻から法螺ほらを吹立ふきたてている。これがまた芸おの悪くなる一原因である。これらは飯めしを食う事を知って、米と云う物の訳を知らぬと同じ事である。即ち大序だいじょが苗代なわしろで、二段目、三段目、四段目に付随する端場はばや道行みちゆきや、景事けいじ等にて組立てて、耕耘こうん幾多の艱難かんなんの経過となって、始めて三段目、四段目の切場きりばと云う米や飯になるのである。その三段目や四段目の切ばかりを修業して語っても、それが不味まずいから、素人義太夫の事を、昔ひやめしから冷飯太夫と云うのである。

芸人は身分は卑くとも、芸は権威である。権威は修業である。その修業が悪くは、本もとが腐っているから、何も無いのである。それを銭ぜにを出して聞く奴やつ、これが人間中の一番の馬鹿者である。この「堀川夜討」の三段目も、今銭を出して聞く太夫はあるまいと思う。

「おわさの口説くどき」はアンナに俗受ぞくうけの陳列会ではいけない。詞ことばノリの心持で、憂うれいの腹でサラサラと語り、捏こねくり廻したり引摺ひきずり廻したりしてはいけない。元来がこの段は弁慶が泣くように書いたもの故、外の連脇つれわきで舞台を破壊させぬようにせねばいけない。皆弁慶に対する芸の保護者でなければならぬ。それから侍従わき太郎が脇わきであるから、なかなか位取くらいどりがむつかしい。

注

- (1) 明治二十四（一八九一）年九月、彦六座で「堀川御所の段」を六代竹本源太夫（一八三七～一九〇一）と鶴沢寛三郎（後の五代仲助）が勤めている。
- (2) 『浄瑠璃古咄集』。不明。著者は三楽か。

増補 浄瑠璃素人講釈 御所桜堀川夜討 三段目切 弁慶上使の段

杉山其日庵

〈出典：岩波文庫『浄瑠璃素人講釈（下）』岩波書店、平成16年11月〉

『邦楽年表』によるに、この外題は、元文二〔一七三七〕年巳の正月二十八日、竹本座に上場し、作者は文耕堂、三好松洛としてある。役場は、二代目義太夫、即ち竹本上総少掾が播磨の少掾と改めてこの三段目を語ったはずである。その後宝暦十三〔一七六三〕年末の十二月九日、竹本座に上場し、序切が竹本志賀太夫、二ノ切が竹本政太夫〔二代〕、三ノ切が同政太夫、四ノ切が竹本錦太夫となっている。その後江戸において、竹本越太夫と初代鶴沢仲助がこの譜節を全部付けかえて上場して大人気であったのが、今一般に語っている「弁慶上使の段」であるとの事。これは、庵主が或る人から聞いた事であるから、参考として書いて置く。以上の筋合から考えて見れば、この段はドウしても播磨風に語らねばならぬのであると思うが、譜もいじり、文章も勝手気儘にいじってあるから、今では捕え所がないので、ただ当節ばかりとなってしまうのである。その中でもドウか「間」だけは、播磨風を失わぬように語って貰いたい物である。

播磨風とは即ち、政太夫の御家柄たる「三上の音」と「コワリの音」と「トンと云う音遣い」を千変万化応用して、念を入れて丁寧に運んで貰いたいのである。播磨風の標本と云うては、庵主の微力でちょっと捕える事もむつかしいが、先ず「ひらかな盛衰記」の三段目「逆櫓の段」をよく味うて見るがよいのである。しかし、「逆櫓」の音遣いばかりで、この「弁慶上使の段」を語り通して見れば、大体において節を破壊さねばならぬ所が沢山出来ると思う。

先ず、「ヲクリ」を語って「ジャン」とめたら、「大間」を明けて「程もあらせず」と云うのにも、「ホド——モー、アラセズ、イリ——イイ、キタア——アアルハ」と云う塩梅に、「間」を大きく明けたら文章を「ツメ」て云う、それを云うたらその次はまた持てるだけ持ってまたキュツと「ツメ」る事。そうするとその後、「テン」と十分の「間」を持って三味線が弾ける。その「テン」と聞いたらまた大きく「間」を明けて、「ホリカワゴシヨニカクレ——エエ、ナキ」と「ハシリ」て「ツメ」るのである。これらを播磨地の運と云っていたら大間違はあるまいと思う。即ち、「ナン——ンギスズリノ、ウミ——イ——ヤマト」〔逆櫓〕と云うのと同じ心持ちである。故に、「武蔵坊弁慶」と云うにも、「ムサシイ——」と持って「音」の尻を自然と「シメ」て、（上げて）「ボウ——ヲヲ、ベシ……ケイ」と「二の上」で息を「ツメ」るのである。それから、「ヘリヌリトツテ」と走って「ウチカツギ」とまた「ハシル」中にも、「地色」の気味で云うて、「ダァ——アイモンノハカマ」と「マ」の字を何所でも下げて、「フミ、シダア、キイ、イイ、（ヤ）イイイイイ」となる事が出来るのである。

それから播磨地に忘れてならぬ事は、「色」と「地色」と「ハシル」のとの語り分けである。即ち、「ムズト座して」は「地色」で、「一礼し」は「色」である。これで皆分るはずで

ある。即ち、「摂州福島松右衛門子榎松、と書いた^{おい}負づるが」までは「地色」で、「縁になつて」が「色」である〔逆櫓〕。それを天下^{ことごと}悉くこれを「詞」に語っている。これらは丸本に「詞」と書いてあっても、何でも^か蚊でも播磨地の本職で、是非「地色」に語らねばならぬと、故団平^{だんべい}から大隅^{おおすみ}太夫がくれぐれも云われたとの事である。丸本と云う物は、「地色」と譜が入っていても「詞」に語る所もあり、また「地ウ」で語る事もあるは沢山ある事にて、それは太夫の力量にて^{じょう}語りを出す時の^{はら}腹加減にて、三味線の譜が付いている事を忘れてはならぬ。ドウか、義太夫節の元祖とも云うべき播磨の少掾の語った心持を取違えぬように、念を入れて語って貰いたいのである。

初代義太夫の節付けは、今日からドウしても分からぬ。即ち、「世継會我」や「愛染川」の^{ふし}譜節を^{せつ}撰津大掾^{せつたいじょう}や^な名庭^{なむら}絃阿弥^{げんあみ}に色々と探がさせたけれども、「地ウ」と「地色」と「詞」とその外は^{せんす}扇子で叩いて「大きな間」を取ったと云うの四ツの事より外、先ず分らぬのである。故にドウしても、二代目義太夫の「播磨地」を標準として、^{すべ}総ての義太夫節の腹構えを極めねばならぬと思うのである。

それから、「イザお通り御案内」の節は、『素人講釈』にも書いて置いたはずであるが、ただ「播磨地」で大事な事は、^{だいもんいり}弁慶の「大紋入」と云う「ヲクリ」である。これは弁慶でなくても大紋で^{はい}這入る時は、この「ヲクリ」を語って好いと聞いている「伴ひ入にけり」である。「トヲモ——ヲヲ、ナアア——イ——イ（ヤ）イイイ——リイ——ニイイ、（ツントン）ケエエ——エエ、リ——イイイ（トントントントン）」となるべきものと聞いている。

（昭和三年四月・『黒白』一二六号）